幼稚園における「やさしい日本語」使用の必要性
―教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状調査から―

西尾　広美

1. はじめに

外国人のための言語支援としては、阪神大震災以降に考案された「やさしい日本語」（佐藤 1996）の取り組みが広く知られているところである。「やさしい日本語」（1996）は当初減災を目的にして考案されたものであったが、定住外国人の増加に伴う社会的ニーズから、今日では様々な取組みがなされるようになってきている。

本稿は、幼稚園現場に焦点をあて、「やさしい日本語」使用の必要性の検証を行うことを目的とするものである。現在の日本語教育では、「取り出し授業」のような子供むけの日本語支援は行われているが、保護者向けの体系立てた支援は特に行われていないという背景がある。こうした状況の中で、子育てに忙しい非母語話者の保護者が日本語学習を十分に行うことは難しいだろうということは想像しやすいと考えられる。また、多国籍の子供を抱える幼稚園現場では、非母語話者の保護者のみならず、教師も非母語話者の保護者に対する情報伝達についての困難を抱えているとも推測できる。

しかしながら、こうした困難な状況に対する有効な具体策が講じられている様子はあまり見受けられない。年齢が低い園児にとって親の庇護は不可欠なものであり、親へ正しく情報伝達がなされることは極めて重要であると考えられる。教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションを円滑にする手段としては、言うまでもなく非母語話者一人一人の母語に対応する母語通訳の調達が望ましいが、現実的にそれが難しい以上、対応する次善の策として幼稚園における「やさしい日本語」使用は妥当であるのではないかと考えられる。

そこで本稿では、実際に多国籍（中国、台湾、韓国、モンゴル、フィリピン、ブラジル、メキシコ、ミャンマー／2012 年度現在）の非母語話者を抱える東京都江戸川区の公立幼稚園のご協力を得、幼稚園における「教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状」を探り、そこから幼稚園現場における「やさしい日本語」使用の必要性の検証を行うものとする。

2. 先行研究

本稿は、幼稚園における「教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状」を探り、そこから幼稚園現場における「やさしい日本語」使用の必要性を検証することを目的としている。従って、先行研究では「やさしい日本語」がどのような経緯で誕生し、どのような特徴をもったものであるかを踏まえておく必要がある。その上で、これまでに幼稚園現場を対象に「やさしい日本語」の研究がなされてきたものがあるかどうか、についても検証していく。

2.1「やさしい日本語」の経緯と特徴

阪神大震災の時に多くの非母語話者が言語的不自由から、災害による被災と言語的被災という二重の意味で災害弱者になったこと（佐藤 1996）を教訓として、減災を目的に日本語に不慣れな外国人の為に災害情報を分かりやすく伝えようという考えが提案された。それが「やさしい日本語（Easy　Japanese）」（佐藤 1996）の考え方である。日本語非母語話者にとって多言語で伝えることが最も望ましいことではあるが、全ての言語に対応できるような情報提供には限界があり（佐藤 2000）、英語のみに依存すると母語が英語でない外国人にはうまく情報が伝わらず、母語以外では、英語よりもむしろ日本語で情報を得たい人が多かった（ロング 1997）からである。この具体的枠組みは、1999 年に『災害時に使う外国人のための日本語案文. 調査―ラジオや掲示物などに使うやさしい日本語表現』（以下、案文マニュアル）として発行された。

「やさしい日本語」は、旧日本語能力試験 3、4 級の語彙を基準（弘前大学人文学部社会言語学教室 2010）とし、文字については小学２、３年生程度の読んだり書いたりするのが難しくない漢字と、平仮名及び片仮名による表現を使用範囲としている（佐藤 2004）。松田、他（2000）によれば、「案文マニュアル」で情報を得る対象者は、簡単な日常会話ができ、平仮名や片仮名が読める程度の外国人で、「案文マニュアル」の使用者はマスコミ、自治体、ボランティア団体などに所属する日本人。案文内容は、地震発生直後から７２時間以内に伝えるべき内容としている。

この案文には、主に緊急時に使われる放送用語やお知らせの例が「やさしい日本語」で示されており、災害が起きた時のラジオや有線放送、テレビの字幕スーパー、掲示物などに使うことを目的としている。また、ニュースという音声情報も取り扱っているので, ポーズ, スピード, 繰り返しといった読み方に関する配慮も挙げられている。松田、他（2000）が日本語能力初級後半から中級前半程度の外国人被験者へ音声情報の理解について聴解実験をしたところ、通常のニュース文の理解率は30%であったのに対し、「やさしい日本語」を用いたニュースでは90%以上になるなど、理解率が著しく高まるという有効性が確認された。「案文マニュアル」（1999）ができたことで、「やさしい日本語」はその理念を継承しながらも、その後減災の為だけでなく、日常生活へと用途を拡大させていった。その一つに、日本語をやさしくする公文書の書き換えと地域日本語教室における外国人と日本人双方に対する「やさしい日本語」の普及を目的とした「ほんやくこんにゃくプロジェクト」がある（庵、他 2010）。

先行研究を見る限り、「やさしい日本語」使用の応用的な試みとして幼稚園現場をとり扱ったものはない。従って、この点において本研究の意義があると考える。

2.2「やさしい日本語」の作成ルール

「やさしい日本語」作成のためのガイドライン（弘前大学人文学部社会言語学教室 2010）によると、「やさしい日本語」作成ルールの概略は以下、表 1 の通りである。

表1　「やさしい日本語」の作成ルール（弘前大学人文学部社会言語学教室 2010）

1	難しいことばを避け、簡単な語彙を使う。
2	１文を短くして、分かち書きにし、文の構造を簡単にする。
3	災害によく使われる言葉、知っておいた方がよいと思われる言葉はそのまま使う。
4	外来語を使用するときは気を付ける。
5	ローマ字は使わない。
6	擬態語や擬音語の使用を避ける。
7	使用する漢字や、漢字の使用量に注意する。漢字にはルビ（ふりがな）をふる。
8	時間や年月日の表記はわかりやすくする。
9	動詞を名詞化したものはわかりにくいので、できるだけ動詞文にする。
10	あいまいな表現は避ける。
11	二重否定の表現は避ける。
12	文末表現はなるべく統一する。

3. 調査概要

(1) 調査目的

調査目的は、「幼稚園における教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状」を探り、幼稚園における「やさしい日本語」使用の必要性を検証することである。

(2) 調査方法

調査方法は、半構造インタビューのかたちをとった。

(3) 調査手順

調査手順としては、調査対象とする７名の幼稚園の教師に、以下の点に留意して「幼稚園に子供を通わせている非母語話者の保護者とのコミュニケーションにおいて、実際に抱えている困難な問題点」について具体的に挙げてもらった。

〖留意点〗

・過去に非母語話者の保護者とのコミュニケーションがうまくいかず困ったことや、問題が生じたことを具体的に思い出してもらう。
・できるだけ具体的にどのような言い方をして上手く伝わらなかったのかを教えてもらう。（その際、保護者の母語も確認。）
・コミュニケーションがうまくいかなかった結果、どのような誤解が生じたのかも、具体的に話してもらう。
・幼稚園の現場で、非母語話者の保護者が日本語の理解が難しい状況に対して、どの

ような対応をしているのか、教えてもらう。

〖主な質問項目〗
- 持ち物について・・通常の時、遠足の時（シート、水筒の中身など）
- 登園、降園について
- 急な変更について・・集合場所、日程、時間など
- 蟯虫検査
- 避難訓練
- 感染症
- 予防注射
- 電話連絡網
- 健康診断
- 保育内容
- 文化習慣の違い
- 保育園の事務手続き（月謝の納入、他）
- 行事

(4) 調査日時・場所

調査は、2012 年 5 月に行なった。場所は、東京都江戸川区内の公立幼稚園の協力を得、使用した。

(5) 調査対象

調査対象者は、東京都江戸川区の公立幼稚園の教師 7 名を対象とした。対象者 7 名の内訳は、園長と以下表 2、3 で示したほし・もり・うみ・ばら・すみれ・さくら組の各クラス担任の 6 名。（＊表 2 と表 3 のばら・すみれ組は同一である。）

4. 調査結果

以下の表 2 は、2012 年度（5 月 10 日現在）の江戸川区内の公立幼稚園の児童数及び非母語話者児童の在籍状況を示したものである。

表2　江戸川区公立幼稚園の児童数と非母語話者児童数の内訳

		児童数	男子	女子	非母語話者児童数（国籍別）
年長	ほし組	35	18	17	7（中国4、韓国1、フィリピン1、ミャンマー1）
	もり組	34	19	15	3（モンゴル1、メキシコ1、韓国1）
	うみ組	35	18	17	0
年少	ばら組	29	15	14	3（中国1、台湾1、フィリピン1）
	すみれ組	30	16	14	2（韓国1、ブラジル1）
	さくら組	31	17	14	1（中国1）

次の表３は、ばら組とすみれ組を例に非母語話者園児の父母の国籍と母語、在日歴、日本語の理解状況について示したものである。（＊幼稚園の事情により、全てのクラスの非母語話者の父母の詳細を把握することが叶わなかった為、上記のクラスのみを記載した。）

表3 江戸川区公立幼稚園の非母語話者父母の国籍・母語・在日歴・日本語の理解状況
（2012年5月現在）

		国籍	母語	在日歴	日本語の理解状況
ばら	①	父　台湾 母　台湾	中国語 中国語	2か月 2か月	読み書きが多少でき、片言会話。日本語がほとんど話せない。
	②	父　中国 母　中国	中国語 中国語	1年半 １年半	来園なし。実態把握不可能。日常の会話可能。家庭内は中国語。
	③	父　日本 母　フィリピン	日本語 タガログ語	— ５年半	— 日常会話可能。平仮名、カタカナは読める。家庭内は日本語。
すみれ	④	父　韓国 母　韓国	韓国語 韓国語	３年 ３年	仕事で来日。提出書類は父親記入。片言会話。園児とは韓国語で会話。平仮名、カタカナは読める。
	⑤	父　日本 母　ブラジル	日本語 ポルトガル語	— 14年半	— 漢字を含め、日本語の読み書き可能。会話も堪能だが、書類手続きや面談は夫が同伴。卒園児の兄弟ガイルガ、当時仕事があり、行事など理解していない面も。

（＊在日歴は“約”で記載）

表３からも分かるように、一口に非母語話者と言っても母語が違うだけでなく、日本語の理解状況もまちまちであることが見てとれる。

上記の事情を踏まえて「幼稚園現場における外国人保護者に対して教師がどのようなコミュニケーション問題を抱えているか」について聞き取り調査を行った結果、以下a~oのような問題点が明らかとなった。

尚、以下に示したa~oの「幼稚園における教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの問題点」について各項目の末尾には、（　）内にその問題を抱えている保護者を具体的に表3の①②③④⑤から示した。これは、保護者によって抱えている問題点が様々であることを示すために表記したものである。

a　＜幼稚園の事務手続き・個人面談＞

両親とも外国人で、特に母親が日本語の理解に乏しい場合には、幼稚園の入園のた

めの手続きや個人面談には両親がそろってくることが多い。父親の方が仕事の関係で母親よりも少し早く来日していることが多く、読み書きが不自由な母親が多いのに対して、父親は多少読み書きができ、比較的日本語に慣れていることが多いため、書類の記入や提出などの手続きがしやすいからである。

（表3の①④が、この問題を抱えている保護者。③⑤は父が日本人であるため、父親が行う。②の父親は幼稚園に来たことがない。）

b ＜語彙の理解・保育料の手続き＞

サポート保育（降園時以降の預かり保育）の料金の支払い方法についてのお知らせを、ポスターで張り出しているが、「サポート保育」という語彙の意味や支払い方法について理解ができず、何度も聞きに来る。日本人保護者のサポート保育の利用者は非常に多いのに対して、非母語話者の保護者の利用者はほとんどなく、利用率は極端に少ない。サポート保育料の（銀行などの）振込みについて知らせる掲示物の記述が難しく、非母語話者の保護者にとって理解しづらい可能性がある。

（①②③④がこの問題を抱えている保護者）

c ＜急な変更（集合場所・時間や日程）＞

急な変更（集合場所・時間や日程）などは伝わりにくい。例えば避難訓練などの際には、その時によって第1避難場所から第2、第3避難場所への移動を掲示するが、読めなかったり、読めても読解が難しかったりして、保護者は避難場所にたどり着くことが難しい。（①④が、この問題を抱えている保護者）

d ＜ポスター・掲示物＞

文字が読めても理解が難しかったり、読むことができない非母語話者の保護者は、ポスターやボードの掲示物を携帯のカメラで撮り、家に持ち帰って配偶者から母語で説明を受けている。（①②④が、この問題を抱えている保護者）

e ＜緊急連絡網＞

緊急性のある重要な連絡事項は、電話連絡網を介すこと、母親に連絡することを避け、幼稚園から直接父親の携帯に連絡するようにしている。父親が幼稚園からの電話を受けて母親に連絡をとり、母語で説明をしている。

（①②③④⑤が、この問題を抱えている保護者）

f ＜電話連絡網＞

電話連絡網は、通常連絡網の最後の順番にあたる人が確認のために幼稚園に戻すという習わしがあるが、非母語話者の保護者はできないため、最後から2番目の母語話者が戻す作業をしている。（非母語話者は連絡網の順番を最後に置いている。）これは、非母語話者が電話の連絡内容について正しくメモをとれないことや、書けても正しく読めないことを懸念して、幼稚園側がとっている対応である。（非母語話者には、教師が直接電話するか、父親に連絡をとっている。）

（①②③④⑤が、この問題を抱えている保護者）

g ＜感染症・健康診断＞

非母語話者の保護者には「感染症のお知らせ」のプリントを渡すだけでなく、その

内容を口頭でも説明しているが理解されにくい。高熱が出ても医者に連れていかないで治そうとする人もおり、子供が感染症だった場合には、園内で流行してしまう。また、入園前の健康診断に関しても、文書及び口頭で説明しているが、理解されにくい。（①②③④が、この問題を抱えている保護者）

h .＜蟯虫検査＞

蟯虫検査などは理解されづらいため、人形を使ってシュミレーションして見せている。（①②④が、この問題を抱えている保護者）

i ＜眼前にない事実＞

すぐ目の前にある事実でないことについては、上手く伝わらない。「もし～なら」「～の場合」といった物事を仮定したり、想定したりする場合は、文書でも口頭でも理解されにくい。特に「引き取り訓練」などの防災訓練の時には、プリントで知らせると同時に、あらかじめ訓練の前日に手順を口頭で説明し、シミュレーションもしてみせるが、実際の訓練では上手くできない。

（①②③④⑤が、この問題を抱えている保護者）

j ＜習慣＞

習慣的なこと（園内でガムはかまない、ジュースは飲まない、靴を脱ぐ）は、理由をうまく説明できないため、伝えるのに苦労する。

（①②③④が、この問題を抱えている保護者）

k .＜語彙の理解＞

近年、非母語話者だけでなく母語話者も含めて、言葉によってはその意味を理解できない場合がある。（例：白湯ーお湯をぬるく冷ましたもの）

（①②③④⑤が、この問題を抱えている保護者）

l ＜登・降園＞

下の子供ができると、母国から祖母が子育ての手伝いに来て、長い間母親代わりとして登、降園の手伝いをするが、祖母の場合は全く日本語ができないため、コミュニケーションをとることができない。（④がこの問題を抱えている保護者）

m ＜園児の生活状況の説明＞

幼稚園では降園の際、子供のお迎えに来た親に対して、その日の連絡事項と園児の生活状況を話すことが日課となっているが、日本語を理解できない非母語話者の保護者には、園児の様子を十分に説明することができない。

（①④がこの問題を抱えている保護者）

n ＜非母語話者の保護者の返事＞

非母語話者の保護者の使う「分かった、大丈夫。」という返事は、実際には話の内容が理解されていない時でも使われることが多いため、持ち物などの連絡事項については降園の際個人的に残ってもらい、実物を見せたり、ジェスチャーなどを交えて説明している。（①②③④⑤が、この問題を抱えている保護者）

o ＜障害＞

発達障害がある場合の説明を上手くすることができない。

5. 分析・考察

上記の結果から、幼稚園では教師が様々な場面で、外国人保護者に対して上手くコミュニケーションが取れないという困難を抱えているということが明らかとなった。

前述した問題点 a〜o を見てみると、a〜d は非母語話者の保護者が幼稚園の「文書」を読めないことが問題であり、e~ k は幼稚園の「文書」が読めないことと、「会話」による情報伝達が上手くいかないことの両方の問題を抱えており、 l 〜o は「会話」による情報伝達が上手くいかないということが問題だということが分かる。e~ k は両方の問題点を抱えているが、これは文書が理解されないために、教師が更に口頭で説明を加えても理解されづらいということを意味している。幼稚園現場では、それだけ困難なことが多いということである。

ところで、上記は「非母語話者の保護者とのコミュニケーションについて抱えている問題」を幼稚園の教師を対象に調査した結果である。教師は、非母語話者の父親と母親両方に関わりをもつ。公立幼稚園は登降園の際に保護者による送迎を依頼しているが、送迎に来るのは母親が多い（父親は仕事ため来られないことが多い）ので、必然的に母親との関わりが深くなってくる。

a ＜幼稚園の事務手続き・個人面談＞で得られた結果を見る限り、仕事の関係で日本語を使用することが多いため母親よりも父親のほうが日本語の運用能力が高いと考えられる。従って、母親ばかり連絡役を担わせるのではなく、日本語のわかる父親をもっと関与させるべきではないかという意見もあるかもしれないが、日本語能力が高いからといって幼稚園とのコミュニケーションが上手くいくとは限らない。何故なら、日本語能力のほかに、子供の状態や幼稚園での生活について正しく把握・理解していなければ、たとえ日本語能力が優れていたとしても幼稚園教師の意図とする内容が理解できない可能性が考えられるからである。園生活や子供の状況についての理解が不十分な場合には、やはり幼稚園教師との円滑なコミュニケーションを図ることは難しくなってしまうだろう。従って、子供と接触する機会が一番多いと思われる母親が幼稚園教師の日本語を理解しなければ、園生活は難しいと考えられる。

実際、幼稚園側もa ＜幼稚園の事務手続き・個人面談＞、b ＜保育料の手続き＞、e ＜緊急連絡網＞、 f ＜電話連絡網＞などについては、調査結果のところで前述したとおり、父親への連絡役を担わせている。しかしながら、c ＜急な変更（集合場所・時間や日程）＞や、特に g ＜感染症・健康診断＞、h.＜蟯虫検査＞のような子供の園生活や健康上の問題に関わるようなことは緊急性の要する場合もあるので、母親に（もちろん、父親もだが）理解してもらう必要があると考えられる。幼稚園現場は、教師と父、母両方の保護者がコミュニケーションを密にして取り組んでいくことで、円滑な保育がなされる。

そういう意味で今回得られた調査結果は、幼稚園側の対応として教師が非母語話者の保護者とのコミュニケーションをとる工夫（例：e、 f ）をしながらも、様々な場面で、外国人保護者に対して上手くコミュニケーションができていない現状を示している。

5.1 幼稚園の「文書」における現状問題の分析・考察

まず、「文書」における問題点から見てみる。

問題点bの　＜語彙の理解・保育料の手続き＞は、「サポート保育（降園時以降の預かり保育）」の理解がされにくい、という問題である。「サポート保育」という語彙からも分かるように、幼稚園では「登園、降園、引き取り」のような幼稚園独特の言葉があることに気付く。これは非母語話者のみならず、実は母語話者にも意外に分かりづらいのではないか、と思われる。

筆者は2012年5月4日に「サポート保育」という語彙の理解について、成人の日本語母語話者5人とモンゴル文化教育大学からの留学生5人に聞き取りをした。その結果、表4のような回答がもたらされた。

表４　「サポート保育」という語彙の意味理解の聞き取り（2012.5.4）

対象	人数	理解内容	結果
日本人（成人）	5 人	全員「保育時間中に何らかの保育内容に関する支援をすること」と理解。	外来語の「サポート」を“支援する”と理解し、該当する幼稚園で使用されている意味と違う解釈となった。
モンゴル人（モンゴル教育大留学生）	5 人	全員、「サポート」、「保育」という語彙自体が分からず、当然内容理解には至らなかった。	外国人留学生にとっては、初めて聞く言葉であったろうと推察。語彙自体が理解できなかった。

表4を見れば分かるように、日本語母語話者は5人とも「幼稚園の保育（活動）の中で、保育について何等かの支援をすること」という解釈をした。モンゴル人留学生には日本語、モンゴル語の両方で「サポート保育」と表記したものを見せて聞き取りをしたが、全員「保育」の意味が理解できず、「サポート」という外来語の意味も解釈できなかった。いずれにせよ、日本人、モンゴル人ともに、正しく理解した人は誰もいなかった。

ただし、上記のような結果になったのは「サポート保育」の時の「サポート」が外来語で、本来の英語の意味とは違うためであり、該当する幼稚園で使用されている意味を解釈できなかったことは致し方なかったとも考えられる。

「サポート保育」は、園によっては「延長保育」「居残り保育」とも言われる言葉で、「保育時間後、保護者が代金を払って子供を預かってもらうシステムのこと」をいうが、園によって呼び方が違い、統一性がない。従って、上記の聞き取り結果からも理

解できるように、たとえ母語話者の親であっても、他の園に通っている親には語彙の意味が理解されづらいものだと考えられる。

このような問題に関しては、幼稚園の文書を「やさしい日本語」にして、理解されづらいと思われるような語彙に注釈をつければ母語話者、非母語話者を問わず、正しい理解が得られやすくなるのではないかと考えられる。母語話者でさえ意味を誤解して解釈してしまうという点から見れば、確かに「サポート保育」という語彙そのものが日本語として適切であるか、という問題点も指摘できなくはないだろう。だが、適切であるかどうかということは別の問題として、実際の現場で使われている以上、正しく理解してもらう為にやさしくすることは大切であると考えられる。「サポート保育」(或いは他の語彙の場合であっても)の語彙そのものを理解できない場合に備えて、語彙の説明を「やさしい日本語」ですることで正しい意味解釈がなされる可能性があるならば、やはり「やさしい日本語」にしていく価値はあると考えられるからである。文化・慣習の異なる非母語話者にとっては、尚更のことである。こうした点から、幼稚園現場では「やさしい日本語」が必要だと考えられる。

また、幼稚園の配布物や掲示物の内容は「お知らせ」や「お願い」の類いが多く、保護者に向けて敬語が使用され、書き言葉に特化した表現が多いことも、非母語話者の理解を妨げている原因になっていると考えられる。下記の例を見てみよう。

資料 1　江戸川区公立幼稚園の文書（2011 年度　「入園のしおり」一部抜粋）

〖欠席届け等について〗

(1) 欠席届けについて

①幼稚園を欠席する場合は、事前に、または当日の朝までに必ず欠席届けを提出してください。欠席届けには、組名・氏名・欠席の期日・欠席の理由等を書いてください。欠席届けの用紙はご家庭にある紙を使い、封筒に入れずにお持ちください。

②欠席届けは、近所の方や知り合いの方に頼んで幼稚園まで届けてもらってください。

③欠席届けを届ける方がいない場合は、電話で連絡してください。電話の連絡は、8 時 45 分から 8 時 55 分の間にお願いします。ＦＡＸでも結構です。

資料 1 の文書は、江戸川区内の公立幼稚園の 2011 年度の「入園のしおり」から、文書を一部抜粋したものである。一読すれば分かる通り、中上級の語彙、文法が並び、長文である。（例えば、文中①の下線部の場合、幼稚園、欠席、届け、事前、当日、提出の語彙は 2 級以上であり、55 拍あり、文が長すぎる。）漢字も難しく、初級者には難解であることが分かる。こうした点からも、初級を対象としている「やさしい日本語」の文書にすれば理解されやすくなると考えられるため、やはり幼稚園の文書に「や

さしい日本語」は必要だと言えるだろう。実際、今回の現状調査で示されたｇ＜感染症＞の事例などからも明らかなように、幼稚園の文書が難しすぎることが原因で読めないという例は少なくないからである。

ところで、文書の読解が不十分ならともかく、文字の読めない非母語話者の保護者の場合には「やさしい日本語」にする意味はあるのか、という意見があるかもしれない。確かに日本に来て間もない非母語話者の保護者は、「やさしい日本語」のレベルまで達していない日本語ゼロ初級の人もいる。但し、入園当初はゼロ初級であった人も生活上必要なため、日本語を学習する。調査幼稚園では、「園内の母語話者と非母語話者の親同士が互いに日本語と中国語を学び合っている」（教師インタビューから）ということも聞いた。また、「子育ての合間をぬって日本語のボランティア教室へ通い、日本語の学習をする人もいる」（教師）という。従って、入園当初はゼロ初級であった人も徐々に日本語が上達していく。いつまでもゼロ初級のままでいるわけではなく、平仮名とカタカナの読み書きなどはマスターしていくのである。だが、すぐに母語話者と同じ文書を読めるようになるわけではない。従って、「やさしい日本語」が理解の助けになると考えられる。

また、今回の幼稚園の現状調査では非母語話者の園児の兄弟関係も調査をした。その結果、上に小学校３年生以上の兄弟がいる人もおり、その場合には上の子が日本語の助けとなっていることが幼稚園の教師から指摘された。

例えば、先に挙げた表３の⑤の被験者の場合には、３人兄弟で上の小学生二人（小6、小 4）は、ほぼ日本語で生活している。園児は日本語とポルトガル語両方を使う。母親（在日歴約 14 年半―2012 年 5 月現在）は日本語の漢字を含む読み書きができ、日本語の会話も堪能であるが、園児とはポルトガル語でも話している。上の子が卒園児であるため園生活の経験はあるが、上の子の時には仕事をしており、幼稚園の行事などへの積極的な参加は今回が初めてである。従って、在日歴が長く、日常生活においてはほとんど日本語に困らないと推測できるものの、必ずしも園生活に詳しいという訳ではない（この母親は以前、避難訓練が上手くできず、教師に子供を車で送ってきてもらった経験をもつ）。非母語話者の保護者が習慣の違うものに対して不安をもつことはおかしくはないと推測できる。実際にこの母親の場合、夫が日本人であるので懇談会や面談は必ず同伴できてもらっており、幼稚園の手続きなどの文書の取り扱いについても夫が処理している（教師インタビュー）からである。この事例からも見てとれるように、日本語が上級レベルの場合でも文化・慣習の相違が理解できないことで新たな経験に戸惑ったり、文書の内容を誤解したりすることも少なからず考えられる。このような場合は文化的な背景や前提条件を説明する必要があると考えられるので、日本語をやさしくした文書の方が正しく理解されやすいといえるだろう。また、「やさしい日本語」の文書にすれば、小 4、小 6 になる園児の兄弟が読んでも理解できるため、年長の兄弟がいる場合には母親の助けとなることも考えられる。そうした点からも、やはり幼稚園の「やさしい日本語」の使用は役立つと考えられる。

上記のような事例から、幼稚園の文書や掲示物を「やさしい日本語」化することは、非母語話者の理解の助けになると考えられるため、幼稚園の文書における「やさしい日本語」の使用は必要だと考えられる。もちろん、現場の教師の負担を考えれば、全ての文書を「やさしい日本語」化して使用することは難しいが、毎年使用される定例のものは作っておくと重宝するのではないかと考えられる。また、「やさしい日本語」版を作成しておけば春の入園時はもとより、学期の途中入園の人のためにも分かりやすく、非母語話者の保護者に対応する幼稚園側の負担の軽減につながると考えられる。

5.2 幼稚園の「会話」における現状問題の考察・分析

次に、幼稚園の非母語話者の保護者に対する「会話」における問題点から見てみる。

調査で得られたl、m、oの事例は、いずれも日本語学習が不十分なために教師の話を聞いても理解できないという問題である。

l のような「非母語話者の保護者の代わりに別の非母語話者が登、降園の手伝いをする」という事例は、「幼稚園ではよくあることだ」（園長）、という。特に中国語母語話者の場合には、「母国から祖母が子育ての手伝いに来て、長い間（少なくとも半年位）母親代わりとして子守りをして、登、降園の手伝いなどをすることが慣例となっている」（園長）と聞いた。このように、もともと日本以外の国で生活していた祖母などが突然日本に来日して子育てを手伝い、幼稚園と関わる場合には、言語的に不十分なことが多く、幼稚園側も非常に苦慮していることが理解できる。

また、mの事例の場合「教師が園児の生活状況の説明を上手くできない」という問題を示しているが、こうした問題だけでなく、「日本語が理解できない人に話しかけても、かえって非母語話者に負担を与えるのではないか」という教師の考えから、「非母語話者の保護者から質問があった場合にだけ答えるようにして、自らは挨拶以外話しかけることを控えるという対応をとっている」という教師もいることが明らかとなった。しかしながら、これでは母語話者の親が毎日降園の際に子供の園生活の様子を理解できるのに対し、非母語話者の保護者は全く子供の様子を理解できないことになってしまう。これらの問題は、教師と非母語話者の親の間で生じるもっとも困難な問題の一つだと考えられるが、「やさしい日本語」を使用してどう対応していくかは今後の課題である。

ところで、i ＜眼前にない事実＞とn ＜非母語話者の保護者の返事＞については、lやmの問題と違い、日本語が全く理解できないというよりは、理解に誤解が生じるという問題を示唆していると考えられる。

このような問題に関しては、幼稚園における「やさしい日本語」の使用が必要かどうかということについて、正か非かを単純に答えづらい点があると考えられる。何故なら、本来「会話」は流動的なものであり、コンテクストや場面、対人関係などを限定して話すことが難しいからである。こうした状況を踏まえた上で考えるならば、上記の問題については、話し言葉の語彙や文型を単に「やさしい日本語」にすることでどのような対応ができるのかについて、現段階では未知の部分が多い。従って、「会話」

については、どの部分において、「やさしい日本語」を使用し、どのような対応をしていくことが非母語話者の保護者に助けになるのかを更に探る必要があると考える。

そのためには、まず幼稚園の「会話」の中で何が誤解を生じる原因となっているのか、問題の所在を明らかにすることが必要であると考える。例えば、教師の使う日本語の表現が難しいために誤解を生じてしまうのか、或いは他の点に原因があるためなのか、といった問題である。もし、教師が使う日本語の表現が難しいことで誤解を生んでしまうならば、日本語（例えば語彙）をやさしく言い換えることで問題解決に繋がる可能性が考えられる。また、日本語の表現とは別の問題に原因がある場合には、その原因の所在を明らかにすることで、非母語話者の保護者に対し、「言い換え案」とは違うやり方で支援していく必要があるだろう。

このようにして考えてくると、幼稚園における「会話」についての「やさしい日本語」の必要性については、今回の調査だけではまだ断片的であり、今後の更なる検証が必要であるといえるだろう。

6. まとめと今後の課題

上記のことを総括すると、幼稚園では教師と非母語話者の保護者との間に「文書」と「会話」を通して様々な問題があり、その対応策として、少なくとも「文書」に関しては「やさしい日本語」は幼稚園現場で必要性があることが明らかとなったと考えられる。また、「会話」に関しては必要性は考えられるものの、具体的に幼稚園における会話のどのような部分で「やさしい日本語」が必要なのかと言うことについて今回の調査だけでは断片的であり、更なる検証が必要であろう。

いずれにせよ、今回の調査結果からも分かるとおり、教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションには様々な困難が生じていることは明らかである。保護者の庇護を必要とする幼児にとって幼稚園から親が正しい情報を得ることは生活上非常に重要なものであるが、多国籍の人を抱える幼稚園で「保護者それぞれの母語通訳のボランティアの調達は難しい」（園長）のが現状であり、現実的に全ての非母語話者に対する多言語化は難しいという状況の中で、その次善の策として「やさしい日本語」なら日本語学習が不十分な非母語話者であっても、初級者向けに日本語がやさしくなっているので、非母語話者の保護者にとって何等かの言語支援になると考えられる。

だが、そのためには幼稚園で有効な「やさしい日本語」はどのようなものなのかを探る必要があると考える。幼稚園の「やさしい日本語」は、その機能が使用される幼稚園の非母語話者の保護者に有効に働いて初めて、本当の「やさしい日本語」としての意味を持つからである。

以上のような理由から、これらの問題点に関する対応策を探るべく、今後は「幼稚園の『やさしい日本語』使用の有効性の検証」を行っていくことを課題としたいと考える。そこから、実際の幼稚園現場に還元できるものを探りたいと考えるからである。

また、今回行った幼稚園における「教師と非母語話者の保護者のコミュニケーションの現状調査」を、他の地域の幼稚園でも行っていきたいと考える。教師と非母語話

者の保護者のコミュニケーションの問題は、抱えている非母語話者の内容や地域によって多様性があることが考えられるからである。

謝辞

幼児教育の大きな研究会や沢山の行事を抱えていたにも関わらず、本研究のために調査に協力して下さった江戸川区の公立幼稚園の園長、教師、非母語話者の保護者の皆様に心よりの御礼を申し上げる。取り分け園長先生の寛大なご裁断がなければ、このように研究を推し進めることはできなかった。重ねて感謝申し上げる。尚、本稿は、2012 年度首都大学東京大学院人文科学研究科に提出した修士学位論文の一部を加筆・修正したものである。指導教官のロング・ダニエル先生（首都大学東京大学院　人文科学研究科　人間科学専攻　日本語教育学教室）に御礼申し上げる。

参考文献

庵　功雄・岩田一成・筒井千絵・森 篤嗣・松田真希子(2010)「「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション実現のための予備的考察」『一橋大学国際教育センター紀要』1, pp.31－46.

災害時の日本語研究グループ（1999）「災害時に使う外国人のための日本語案文」『文部省科学研究費（国際社会における日本語についての総合的研究）報告書』

佐藤和之（1996）「外国人のための災害時のことば」『言語』2,　pp.94－101.

佐藤和之（2000）「『災害時の外国人用日本語』マニュアルを考える」―災害時情報と外国人居住者―『日本語学』19－2, pp.36－51.

佐藤和之（2004）「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23－8, pp.34－45.

松田陽子・前田理香子・佐藤和之（2000）「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7, pp.145－159

ロング・ダニエル（1997）「緊急時報道における非母語話者の言語問題―応用社会言語学の試み―」『日本研究』12, pp. 57－95, 中央大学校日本研究所

参考資料／参考ＵＲＬ

東京都江戸川区公立幼稚園（2011年度）「入園のしおり」

弘前大学人文学部社会言語学研究室（2005）「新版・災害が起こったときに外国人を助けるためのマニュアル」（2012 年 4 月 15 日参照）
http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/newmanual/top.html

弘前大学人文学部社会言語学研究室HP　http://uman.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/（2012年4月15日参照）

弘前大学人文学部社会言語学研究室（2010）「「やさしい日本語」作成のためのガイドライン」http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ejgaidorain.html（2012年4月15日参照）

（にしお　ひろみ・首都大学東京大学院博士前期課程修了生）